水無月（みなづき）

陰暦六月のことを水無月と呼びます。歳時記では七月に入っていますが、水無月という言葉からは、やはり六月の響きが爽やかに感じられます。この月は田植えに水が多く必要なので水の無くなる月と言ったらしい。

昔、水無月の晦日（みそか）に罪や穢れを除き去るため、宮中や諸社で祓い（はらい）の行事が行われ、それを夏越の禊（みそぎ）と言いました。そのため陰暦六月を夏越の月という言い方もあります。庶民も川や海で身を清めたり、牛馬を水辺で遊ばせたりしました。また、この日は神社で茅の輪（ちのわ）をつくり、人々はそれをくぐると病気や災難を免れると信じていたようです。

植物としては早苗（さなえ）ですが、この近くで見ることがむつかしくなりました。

（村島）

昨今では御田植祭などでしか
見かけなくなった早乙女姿

田に植えられた早苗